

【日常を彩る透明な活力】

柏市立高柳中学校 三年 丸山 和花

八月の午後。クーラーのない武道場は、まるでサウナのような熱気に包まれていた。一歩でも足を動かすだけで、肌にまとわりつく湿気と熱に息が詰まりそうになる。練習に打ち込む私たちの体からは、絶え間なく汗が噴き出している。喉はカラカラに張り付き、頭の中はひたすら「水」の存在に支配されていく。

「休憩！」

先生のその声と同時に、私は水筒を手にした。蓋を開け、冷えた水を一気に喉に流し込む。その瞬間、喉を通る冷たさが火照った体の内側から染み渡り、一瞬だけ熱がスッと引いてくのを感じた。細胞の一つ一つが生き返るような、あの強烈な充足感。それは単なる水分補給ではなく、活力が再び体に満ちていくような、至福のひとつきだった。

この武道場での体験は、私に一つの気づきを与えてくれた。

私たちは何も特別な時にだけ、水の大切さを感じているわけではない。私たちは何も特別な時にだけ、水の大切さを感じているわけではない。朝、蛇口をひねって、冷たい水で顔を洗うとき。眠っていた意識がシヤキツと目覚め、新しい一日が始まる。夜、部活で疲れ果てた体をお風呂に沈めるとき。温かい湯船に包まれていると、一日の緊張が溶け出し、心までリセットされる。日常の中で当たり前のように過ごしているこれらの時間も、実は水がなければ成り立たない、かけがえのない瞬間なのだ。

しかし、世界に目を向けてみると、この「当たり前」がいかに恵まれたものであるかを思い知らされる。ニュースでは、大規模な地震によって何週間も断水が続き、給水車の前に長い列を作る人々の姿が報じられている。また、地球の裏側では、私が部活中に飲んだような清潔な水さえ手に入らず、遠くの川まで何時間もかけて水を汲みに行く同年代の少女たちがいることも知った。

武道場でのあの一口の水。顔を洗う時の爽快感。お風呂での安らぎ。

それらはすべて、蛇口の向こう側で水を管理し、安全に届けてくれる人々がいて初めて享受できる、「奇跡」のような恩恵なのだ。

私たちは、水があることを当然だと錯覚し、その価値を忘れがちになっってしまう。

しかし、水がなければ、私は部活を続けることも、心を整えることもできない。

私にできることは、まずこの感謝の気持ちを忘れないことだ。出しっぱなしにしない、汚さないといった小さな節水は、単なるマナーではなく、私を支えてくれる「水」という存在への敬意だと思う。

武道場の熱気の中で感じた、あの冷たい水の救い。その一滴一滴が私の体の一部となり、今日を生きる力になっている。水は私を潤すだけでなく、世界と、そして未来の自分とも繋がっている。これからも、蛇口から流れる透明な輝きを大切に守りながら、私は一歩ずつ成長していきたい。